

心やりみち

…被災地支援情報…

第99号 発行日 2013.11.7
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax: 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号: 01180-6-68556(郵便振替)

2015市民・NGOフォーラムに向けて 「3.11から1.17へ」

阪神・淡路大震災

20年
年の検証

阪神・淡路大震災から19年を目前にし、再来年の2015年1月17日には震災から20年を迎える。兵庫県では20年の節目に検証を行うということを発表しているが、民間サイドでも20年間の検証を行おうということで、当センタースタッフが呼びかけ人となり、2015市民・NGOフォーラム準備会としてこれまで3度のミーティングを開いてきた。

2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所での事故により、日本は未曾有の複合災害を経験することになった。当センターも発災直後から復旧、その後の復興の過程に携わっていく中で、阪神・淡路大震災の教訓が活かされず、同じ過ちを繰り返している現実を目の当たりにし、忸怩たる思いを痛感してきた。

1995年12月、私たちは2万人の被災市民とともに「くらし再建『いま』を見すえて」というテーマを掲げて「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を開催し、神戸宣言を発表した。そこには「被災地の私たちは、自ら『語り出す』『学ぶ』『つながる』『つくる』『決める』行動を重ね、新しい社会システムを創造していく力を養っていくことから、私たち自身の復興の道を踏み出していく

ことを強く呼びかける」と掲げられている。

あれから18年、新しい社会システムは構築されてきたのか、一人ひとりに寄り添い、個の尊重が保障されてきたのか、自然との共存は実践されてきたのか……など振り返れば課題が山積していることに気づく。だからこそ「3.11」を踏まえながら「1.17」をもう一度、検証しなければならないのではないだろうか。「3.11から1.17へ」の由来だ。

この間のミーティングでは、様々な立場から意見を出し合い次の世代に何をどうやって伝えるのか?ということを議論してきた。一方的な押し付けにならないように次世代が何を受け継ぎたいと思っているのかを考えてきた。アメリカのインディアン、イロコイ族は、常に「子どもたちの子どもたちのため」どうすればいいのか学ぼうと、7世代先のことを想い声をかけ続けているそうだ。このフォーラムに集う私たちも次の次の次の世代に何を残せるかを熟考したいと思っている。そのためにも次世代が自ら考え、そして行動していく場を作ることが大切になるだろう。2015市民・NGOフォーラムがそうした場になることを目指し、しっかりと次世代へと思いを伝えていきたい。

(頼政良太)

20th
1995-2015



福島と水俣 終わらない闘い

「3・11」は、北は秋田県から南は千葉県の沿岸部分まで、広範囲に被害を及ぼした。中でも、県内外に15万人を越える避難者と加えて被曝を恐れて非難した数え切れない自主避難者を出した「東京電力福島第一発電所事故」が引き起こした原発災害は、未だ収束することなく被害を拡大し続いているといつても過言ではない。3・11は空前の複合災害となった。当NGOは3・11後、福島を忘れないこ

と、福島を支援し続けることを誓いながら、原発を学ぶ寺子屋勉強会を続けてきた。(2013年10月現在、10回開催。)

やがて3・11から1年余りが経過した2012年5月5日、奇しくもこどもの日に日本で稼動している原発がすべて止まった。しかし、フクイチの事故がもたらしたさまざまな問題が何一つ解決しない中で、6月に入り関西電力は、あろうことか福井県大飯町にある大飯原発を稼動させた。福島と向き合う中で寺子屋勉強会を始めた私たちは、関西電力大飯原発が止まるまで「24時間リレーハンスト」を続けることで、大飯原発の停止と日本において原発に依存しない「原発ゼロ社会」の実現を訴えた。全国から、この呼びかけに賛同してください、24時間リレーハンストに参画して下さった方々は、延べ757人にはのぼる(2013年10月8日現在)。

私たちが全国の賛同者と掲げたスローガンは、原発ゼロ社会をめざして「子どもたちの 子どもたちの 子どもたちのために」である。このことは阪神・淡路大震災を経験し、そして3・11と向き合ってきた、いまを生きる私たちの責任である。

さて、水俣病公式発見から58年が経った2013年10月5日、熊本県水俣市公民館で「水俣から水銀条約を問

う国際シンポジウム」が開かれた。同シンポでは、水俣病の原因となった水銀を海洋に流さない、空気中にばら撒かない、そして水俣病被災者にきちんと償うことを約束させた「水銀条約」が締結されるよう訴えられた。(結局日本政府の要望で「水俣条約」となった。)

水俣では、未だに症状を訴え、また今後の症状の悪化を心配する被災者が暮らしている。同シンポを主催した代表である胎児性の水俣病被災者坂本しのぶさんの「私は悪くないのに水銀の被害に遭いました。まだまだ水俣病は終わらない」という切実な訴えを、私たちは忘れてはならない。水俣は終わっていない。もちろん福島も終わっていない。このシンポは、水俣と福島の被災者が連帯して戦わなければならない第一歩としての大変な会議でもあった。

(村井雅清)

▼水俣病を伝える資料館にて



▼当センターの観音様



コラム

■観音様の不思議なご縁

当センターの中庭には阪神・淡路大震災7回忌のおりに建立された観音様がおられます。この観音様ですが、東日本大震災発生以来なんとも不思議なご縁があるんです。

釜石市でまけないぞうを中心はずっと熱心に支援をしてくださっている不動寺というお寺があるのですが、その不動寺にも実は観音様がいらっしゃいます。そして、なんとこの観音様にお祈りをすると不思議とまけないぞうの注文が入ってくるのです。スタッフの間ではもしかしたら不動寺の観音様と当センターの観音様がつながっているのかもしれない噂しています。当センターの観音様に被災地の復興をお願いしたら、釜石の復興に役立つかもしれませんね。なお、釜石の観音様の台座の中には、亡くなつた方を供養する600巻の写経が奉納されています。

水俣から伝えたいこと

同じ過ちを繰り返さないために

被災地NGO協働センター
スタッフ 福岡洸介

9月13日から3泊4日の行程で、水俣病について学ぶための研修を行った。

代表の村井が古くから水俣病に関わり続けていた縁があり、現地で被害者にお話を伺うことができた。水俣病発生の経緯はよく知られているため省略、ここでは被害者のお話をまとめて紹介する。

1956年に初めて水俣病が公式確認され、病名も原因もすぐにはわからぬいため、被害者はコミュニティ内で恐れられ忌避された。だが症状には個人差があり、体が怠い、歩いていて躊躇やすい程度の症状は、栄養失調と診断されることもあったそうだ。

15歳のときに発症したIさんは、このとき水俣病は水銀中毒であることが既に解明されていたが、隔離病棟にて治療を受ける。重金属を体外に排出するための薬剤注射は強烈な痛みをもたらし、そのうえ効果の大小には個人差があるのだが、Iさんはかなり良くなつたようだ。それでも視界は前方約10°の範囲に狭まり（視野狭窄）、また聴力は正常で声は聞こえるものの、言葉の意味を理解しにくくな

▼工場の排水口。水俣病はここから始まつた



▲犠牲者の眠る乙女塚にて

る障害が残つた。

母胎に蓄積した水銀が胎児に流れ込むことで、胎児性と呼ばれる先天的な水俣病被害者も生まれる。Sさんは生まれつきの被害者として約50年間、裁判や語り部などの活動を行つてきただ。水俣病発生の因果関係が判明してチッソ株式会社への責任追求が始まつた当時は、大企業のエリート集団によって巧みに、被害者の訴えが退けられることもあつたといふ。

被害者が高齢化して亡くなりつつあり、自分も歳をとつた。チッソ株式会社に対する怒りは冷めないが、もう時間が無いという焦りを感じているし、水俣病への関心を引き継いでくれる次世代が居ないことが残念だと彼女は言つ。九州で平和教育といえば、長崎に行き原爆について学ぶことがほとんどで、水俣病は人権問題ではなく環境問題だと捉えられているそうだ。

Sさんは、水俣の教訓を現在の福島にも活かしてほしいと考えてゐる。それは水俣のことを忘れてほしくないという気持ちだけではない。そうすることで助かる人が多くいると確信している。

福島は水俣と違い、海だけでなく野山にも汚染が拡大している。また放射性物質がもたらす被害は水銀中毒よりもっと長い期間、その地をルーツとする人を脅かす。更に、責任を負うべき機関が誠意ある対応を行うとは限らない。Sさんは自分たちを見て教訓とし、予測できる不幸と、避けられる悲しみがあるのならば避けてほしいと、そう語つた。

今回お話を伺つた我々は直接的な加害者、被害者ではないという意味では、当事者にはなり得ない。しかし水俣の教訓を知つた者の立場から、これを被災地復興支援に活かすことができる、確実な発信の方法を模索する必要があると考えさせられた。





山口・島根豪雨水害での支援活動

被災地NGO協働センター
スタッフ 頼政良太

2013年7月28日、中国地方の山口県・島根県を集中豪雨が襲い、山口市内で1時間雨量が最大143mm、山口県の観測史上最大の激烈な大雨となりました。この大雨によって、山口県萩市や山口市（旧阿東町）、島根県津和野町などで甚大な被害がもたらされました。



▲被害の様子（山口県萩市）

週間たっても泥だしが手つかずだという高齢の一人暮らしの方がいらっしゃいました。災害時にこういった高齢者や障がい者の方々が取り残されてしまうという課題は全く解決していないということを改めて感じました。

ある1人暮らしの90歳の女性の方は自宅が床上浸水したにも関わらず、ボランティアの活動を遠慮されていました。「私はもうすぐお迎えが来るからいい」とおっしゃっており、何度も訪問しても断られてしまいました。しかし、近隣の住宅でボランティアが大活躍するのを見て、この方からもぜひボランティアに来てほしいとの連絡がありました。一度訪問して住民の方に断られても、様々なアプローチをすることによってその方々の力になることが出来る可能性があり、ボランティアを断っているのだから困っていない、と決めつけることは出来ないということが分かります。

らっしゃいました

りんご園

TEL:08395-6-0620

ご観光協会 指定園

リンゴ園も被災を受けました

当センターも震災がつなぐ全国ネットワークの一員としてスタッフ1名を7月30日から山口市（旧阿東町）災害ボランティアセンターに継続的に派遣し、その後2回にわたってスタッフが神戸大学の学生ボランティアと一緒に泥だし活動などを行いました。災害ボランティアセンターでは阪神・淡路大震災以来、お世話になっている山口災害救援のSさんとも合流し、運営のお手伝いをしながら地域の方々との話を聞くニーズ調査などを行いました。

旧阿東町は2010年に山口市と合併をした町で主な産業は農業で、西日本最大級のリンゴの産地としても有名です。今回の水害では阿東町の徳佐地区と嘉年地区という2つの地区が大きな被害を受けました。当初は嘉年地区に向かう国道315号線の各所で崩落が発生していたため徳佐地区の方に重点的にボランティアの方々が入っていました。そのため、嘉年地区では災害後1



▲ボランティア活動の様子

また、あるお宅では実家が被災し九州から帰ってきたという方とお話しする機会がありました。その方は涙ながらに「ボランティアが来てくれて本当にうれしい。九州に住んでいたけど、今回の水害を機に山口に帰ってこの家に住む決心をしました。ボランティアが何人も本当に延べで何百人も来てくれて…。次に山口に来た時に気軽に寄って遊んで行ってもらえるような家にしていきたいと思っていますので、是非遊びに来てください！」とおっしゃっていました。このようなボランティアとの交流を通じて被災者が元気になっていくということを改めて実感しました。やはり災害ボランティア活動は一人ひとりの被災者に寄り添い向こうということが大切なんだと感じました。



“お熊甲の鉦の音聞けば、足がひよいひよいしてならぬ”

カーン、カーン、コーン、コン…お熊甲祭りの独特のゆったりとした鉦と太鼓のリズムは私たちを祭りの世界に引き込んでいきます。お熊甲祭りに参加し始めて5年もたつと、“お熊甲の鉦の音聞けば、足がひよいひよいしてならぬ！”という言葉を実感します。

お熊甲祭りは、能登半島七尾市の中島町に1000年以上前から伝わるお祭りで、朝鮮半島を通じた大陸文化を色濃く継承しているお祭りとしても有名です。本社である久麻加夫都阿良加志比古（くまかぶとあらかしひこ）神社には、朝鮮半島の百濟国の王子様がご神体として祀られています。

このお熊甲祭りには、能登半島地震の支援をきっかけとして2009年からKOBE足湯隊の学生さんと一緒に参加するようになりました。能登半島は過疎化が進んでおり、お熊甲祭りでも担ぎ手が不足して、中には御神輿を出せない集落もあります。私たちがお世話になっている小牧集落では地域外からも学生や若者を呼んで担いでもらい、地域の活性化に取り組み、交流人口を増やそうという試みです。今年はその取り組みが認められ、石川地域づくり表彰大賞を受賞されました！



今回は参加者の神戸大学1回生の古田さんの感想をご紹介します。

お熊甲祭の魅力は、実際に参加させていただくことで感じるのが一番です。

入江や山林、田畠などの美しい風景が広がる自然豊かな能登。そこで昔から行われている祭は、初めて見る者も惹きつける雄大で美しいものでした。揃いの法被で神輿や旗を担ぐ担ぎ手たち、頭上に煌めく集落の旗、威勢よく太鼓を叩く子どもや面をつけて踊る猿田彦、見るものすべてが新鮮な私は目も心も釘付けでした。振る舞われる酒で相当酔っ払いながらも決して担ぐ手を離さない男たち、終始聞こえる祭の掛け声、そういういたものに囲まれていううちに、いつのまにか祭の空気へのまっていました。祭が無事終わったときには、僭越ながら感動して涙が出るほどでした。祭に携わる人の思い、見守る地元の人たちの心を、ほんの少しだけ感じられて、私は大変幸せな経験をさせていただいたなと思います。

私のような他県からの学生を受け入れてくださった小牧集落の皆さん、大変お世話になったKさんには深く感謝いたしております。素晴らしい時間をありがとうございました。皆さまの益々のご活躍と、祭の末永い発展を、私がどこにいようとお祈り申し上げます。来年も再来年も、その先もずうつと。



神の使いの“猿の子”にまけないぞうを付けていただいています！



女性陣はお道具もちとして参加しました！



お熊甲祭り最大の見せ場！各集落の島田崩しです。

海外の 現場から

CODE

海外災害援助市民センター

2013年9月11日から17日、メキシコでハリケーン“イングリッド”と熱帯低気圧“マニュエル”的2つの暴風雨が同時に襲ったことにより大規模な豪雨災害が発生しました。土砂災害も併発し、多くの住民が被災しました。メキシコ内務大臣が「メキシコの3分の2が被災した」と言うほど、被災した地域が広く、特にメキシコ南部グエロ州山間地域では700のうち600の村の被害状況が未だにわかつていません。

CODE海外災害援助市民センター事務局では発災直後より、阪神・淡路大震災以降連携をとっている、海外研究員のクワウテモックさん（メキシコシティ在住）に連絡をとって情報収集を行ってきました。被災地では衛生環境の悪化から感染症も発生しており、これまでに159人がコレラに感染し、うち1人が死亡しました。また、多くの家畜や農作物が水に流されたり、土砂災害にあったりした影響から、山間地域では深刻な飢餓

2013・9 メキシコ暴風雨被災地救援を開始しました

CODE海外災害援助市民センター
スタッフ 上野智彦

が発生しています。被災者はこういった深刻な状況から再建しようと頑張っています。

2013・9メキシコ暴風雨被災地救援活動へのご支援よろしくお願ひいたします。

皆さまから頂いた募金は、クワウテモックさんを通じて、被災者の方のための活動に使わせていただきます。



▲救援物資を受け取る子ども

☆2013・9メキシコ暴風雨救援募金に
ご協力下さい：

郵便振替：00930-0-330579

加入者名：CODE

*通信欄に「メキシコ」と明記してください。募金全体の15%を上限として事務局運営・管理費に充てさせていただきます。

☆連絡先：CODE事務局：078-578-7744

CODE寺子屋

南海トラフ巨大地震の発生が現実味を帯びてくる中、どのように津波から命を守るべきなのかを考えおくことが大切です。今回の寺子屋では、津波による被害の多い南米のチリからICAチリ代表理事のイザベルさんをお呼びして、チリでの津波防災について学びます。また、イザベルさんと一緒に高知県の取り組みを学ぶ研修を行いますので、そちらもご紹介いたします。

【講師】イザベル・デ・ラ・マザさん
(ICAチリ代表理事・ICAインターナショナルアメリカ部門副代表)

【ファシリテーター】室崎益輝
(CODE副理事)

【日時】2013年12月14日（土）
17:30～受付 18:00～20:00

【場所】神戸市勤労会館講習室403
(神戸市中央区雲井通5丁目1-2)

【参加費】500円

【備考】終了後、懇親会を行います。
参加希望の方はお申し出ください。

【問い合わせ先・お申込み】

CODE海外災害援助市民センター

TEL:078-578-7744

FAX:078-574-0702

E-mail:info@code-jp.org

Peace寺子屋

第3回Peace寺子屋
～福島のことを一緒に語ろう～

東日本大震災から2年7か月が過ぎ、被災地に関する報道は減っています。原発については、汚染水漏れの報道は連日のようにあるものの、実際に福島に住んでいる方の様子はほとんど伝わってきません。そこで、今回は福島で活動されている若手の鎌田千瑛美さんをお呼びし、福島のことをお聴きしながら、参加者（特に若者）とざっくばらんな議論を行う会としたいと思います。福島のことが良くわからない、という方も大歓迎です。ぜひ一緒に福島について語り合ってみませんか？

【講師】鎌田千瑛美さん

(一般社団法人ふくしま連携復興センター理事、任意団体peach heart共同代表、ふくしまキュン♡キュン♡大學学長、せんきょcampふくしまメンバー、ふくしまの声ライター)

【日時】2013年11月25日（月）

18:30～21:30

【場所】被災地NGO協働センター

【参加費】一般2500円/学生1500円

【備考】講演後の食事つき、参加費用に含まれます。途中参加可能

【問い合わせ先・お申込み】

被災地NGO協働センター

神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL:078-574-0701

FAX:078-574-0702

E-mail:ngo@pure.ne.jp

■入会・カンパのお願い！

私たちの活動を継続するために、被災地NGO協働センターでは会員や活動資金のカンパを募集しています。詳しくはセンターまでお気軽にお問合せ下さい。

★団体会員	年会費￥10,000	×	1口以上
★個人会員	年会費￥3,000	×	1口以上
☆団体賛助会員	年会費￥10,000	×	1口以上
☆個人賛助会員	年会費￥3,000	×	1口以上
☆自由選択会員	年会費￥	任意の額	

郵便振替 加入者名：被災地NGO協働センター

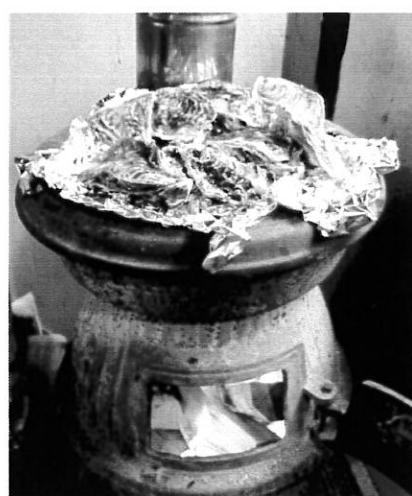
口座番号：01180-6-68556

■編集後記

こんにちは！今回じゅりみちを編集したスタッフの頼政です。11月に入りすっかり寒くなりましたが、みなさん体調を崩してはいませんか？

当センターの事務所ではここ数年すっかりおなじみになった薪ストーブをそろそろ稼働させるために、佐用町へ薪を取りに行く計画を立てているところです。11月24日(日)、お時間のある方は是非当センターへご連絡を！

（写真は昨年、薪ストーブを使って牡蠣を焼いた時の様子です。）



ぞう 通信。

第50号 2013.11.07

発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL: 078-574-0701 FAX: 078-574-0702 <http://www.pure.ne.jp/~ngo>



東日本大震災から、2年と半年が過ぎました。被災地では、町にはトラックやブルドーザーが行き交い、公共工事が進んでいます。被災者の声はその音にかき消されています。住宅の建設は遅れ、仮設も4年の延長になりました。けれど、4年ですむのかどうか、被災者は不安を募らせていました。

2年半が過ぎた被災地では…

2年半が過ぎた被災地では、道路や防波堤など公共事業に関する工事が多く、道路はトラックが行き交い事故も多発しています。2年半を過ぎ、被災者の人はごくわずかではありますが、災害復興住宅に移ったり、自力再建をした人もいます。限られた人にしか挨拶もせず仮設を出していく人たち…。自分だけ、申し訳ない、後ろめたさを感じながら…でも本来ならば新しい一步を踏み出すことにお互いに笑顔で見送ったり、見送られたりするはずですが、いまの被災地ではなかなかそれができません。なぜでしょう？

公共工事はみるみる進み、山は削られ、海はコンクリートで埋め尽くされ始めています。しかし、終の棲家となる住宅に関しては、遅々として進まず、行政は土地の確保が難航しているという。それなのに、道路を造るための土地の確保はあつという間に進んでいく。おかしいと思うのは私だけではない、当事者である被災者はつぶやく。「あの津波で防波堤なんか流されたのに、またそれを最初に造っている、どうせ流されるのに…」「行政に聞いたら、役場の金庫にはお金はないと言われた、でもどんどん大きな施設の建設は進んでいる」「どうせオリンピックに人手も資材も取られて、こちらの復興はまた遅れる」。被災者の人たちはいいようのない不安が募り、他人を思いやる気持ちの余裕すらなくなっているのです。

阪神・淡路大震災から3年目に私たちKOBEの人たちは「市民がつくる復興計画 私たちにできること」（市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会編集）を提言しました。その本の“はじめに”的部分に以下のように記してあります。

「3年間の復興事業は、高速道路や港の岸壁を元どおりにしたが、生活再建の視点から見れば、文化も福祉も経済も住宅も、大地震の前に比べて落ち込んだままだ。政治家や官僚が考える復興と、私たちが願う復興はどこか違っているのではないか。大地震から4年目に入っても地震災害は進行している。いま、市民が求める復興の姿を描き出さなければならない」。

いま東日本の被災地をみてると、阪神・淡路の復興の過程とさほど変わりはないように思えます。なぜ、また同じように被災者の声を丁寧に聞かないで、政治家や行政主導の復興が進んでいるのではないのでしょうか？KOBEのような同じ過ちは繰り返してほしくない。

被災地に来ると、どうしても3.11から1.17へと想いを巡らせてしまいます。私たちにできることは何かを考える日々です。

先日も、ある被災地では、行政から説明が不十分でよくわからないので、相談にのってくれませんか？というお話を受けました。ひまわり弁護士会の弁護士の方に相談をしました。被災者の方もお話を聞いて、気持ちが安心しましたと言ってくれました。もう少し、わかりやすく丁寧に説明してもらえば、被災者の方のとまどう気持ちも軽減されると思います。

いま、被災地では、自力再建した人、復興住宅に移った人など、格差が生まれ気持ちはにも不安を抱えています。そこへ充分な説明がないと、精神的に不安定になってしまいます。震災で普段したことのない行政とのやりとりがあって、簡単なことでも慣れない人にとっては、なかなか難しい手続きがあります。中には充分理解できないまま手続きをしている人もいます。

行政は、ホームページや会議などで説明していると言いますが、会議は平日の昼間、僻地ではバスなどは朝か夕に数本程度、お年寄りは車も持たず移動が困難な人が多く、ましてパソコンなど使えるわけもありません。そのような状態で住民との合意形成ができるとは思えません。

前述したように、阪神・淡路の被災地でも被災者の声は充分に届かず、18年経って行政も見直すというまでの結果となりました。

住民の合意形成というものがとても大切だと東日本の被災地を見ていて痛感します。国交省からも「東日本大震災の被災地における復興まちづくりの進め方」という合意形成のガイドラインが出ていて、「まちづくりを成功させる秘訣の一つは、地権者等の関係者に主体的に計画作成やまちづくりに参加してもらい、自分の問題として関わりを持ってもらうことである。このため、被災地の復興に当たっても、行政当局が作成したまちづくり計画を押しつけるのではなく、被災者自身が計画作成に主体的に関わるとの意識を持つようになることが重要である」と書かれています。

KOBEのときのような充分できなかった、被災者主体のまちづくりを進めてもらいたいです。

担当:増島 智子

～作り手さんからのメッセージ～



リングぞう ¥500



子ぞう1つ¥300

仮設の部屋の中には一々と/orしていると心の中がストレスと
心にわだかまりがつのって、ぞうさんに夢中になっていると
何もかも忘れられ、元気になってきます。

(2013/08/09 岩手県大船渡市 女性)

震災から月日が過ぎ私も年を重ねて老齢していく。将来を考えると気が沈む。一旦ぞうさん作りをやめようと思った。けれど、学生ボランティアの方々とぞうさんを久しぶりに作製。楽しかった。「ありがとうございます」と買って頂くには、一針一針を大事に作成していく。その時はぞうさんに周囲で、余計な事は考えない。ぞうさんの顔を見て、お客様も私も和顔になれる。焦らず一歩一歩、一針一針、前へ足ぶみしながら進もうと、また作り出しました。

ご支援ありがとうございます。

(2013/07/19 岩手県陸前高田市 女性)



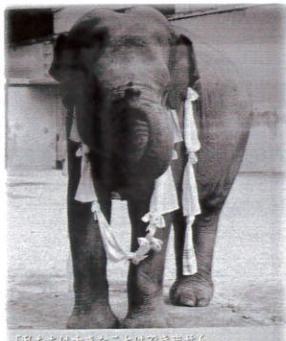
～支援者からのメッセージ～

ぞうをタオルで作ったり、足湯をしながらみんなと会話したり、そんな何気ないことで生きる希望となり、少しずつでも笑顔になれるということを聞き、今の自分にとって当たり前のことがどれほど幸せなことなのか気付かされました。同じ日本でまだ苦しんでいる方がいるということを忘れずに、精一杯生きていきたいと思います。



東日本大震災の被災者のみなさまへ、少しでもお役立て頂ければ幸いと思い、またタオルを送らせていただきます。まだまだ復興の道のりは遠く、大変厳しい状況ではありますが、私にできることをやらせて頂こうと思いました。支援事業は本当に大変だと思いますが、神様のご加護が必ずあるようにと、いつも祈り続けます。

ズゼちゃん



「私たちには大きなことはできません。
ただ小さなことをやってやることはできます。」

阪神・淡路大震災のときに、ラトビアから送られてきた王子動物公園のズゼちゃん。97年に「まけないぞう」が生まれて、ズゼちゃんに「まけないぞう」を首飾りにして、プレゼントしました。当時は4歳だったのですが、いまはりっぱな23歳の大人になり、このたび妊娠したそうです。そして、お産のために千葉県にある市原ぞうの国にお引っ越ししました。かわいい赤ちゃんが生まれたらいいなあ。

makenaizoneの田中編集長(右)です。今回初の岩手訪問。素敵なお写真を持参して、作り手さんと笑顔の交流でした。



アイルランド在住の田中さん、世界に「まけないぞう」の輪を広げてくれています。作り手さんは「こんなに外国人の方が応援してくれているだね。ぞうさんがんばろう」と。。。